

新港の森「マツの不思議」観察会資料

(家に帰ってから読んでください)

佐伯 肇 (森林インストラクター/樹木医)

新港の森でたくさん見られるクロマツ

日本に自生するマツ属は、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツ、キタゴヨウ、ヒメコマツ、チョウセンゴヨウ、アマミゴヨウ、ハイマツの8種があります。しかし、代表は、何といたってもアカマツとクロマツで、普通「マツ」といえばこの両種のどちらかを指しています。なお、カラムツ、トドマツ、エゾマツなど、マツという文字のついた樹種がありますが、これらはマツ属ではありません。

クロマツとアカマツの違い

| | クロマツ | アカマツ |
|----------|---|---|
| 樹皮 | 黒褐色  | 赤褐色  |
| 葉 | やや太くて硬い | やや細く柔らかい |
| 葉の先にさわると | 痛い | 痛くない |
| 枝ぶり | 大きく垂れ下がったような樹形 | 横に伸びる感じの樹形 |
| 冬芽 | 白い  | 赤い  |
| 植生場所 | 山に多い | 海に多い |

高砂席の秘密

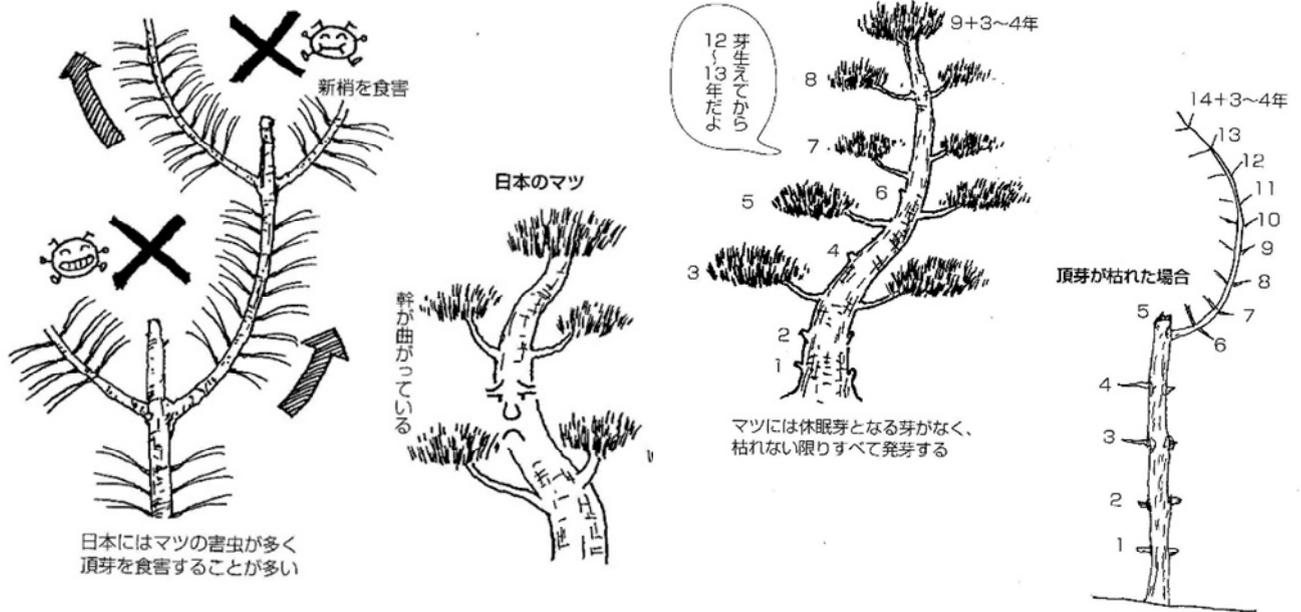
高砂席は結婚披露宴で新郎、新婦が座るメインテーブル席のことです。兵庫県高砂市に、高砂神社という神社があります。ここには昔から「高砂の松」と呼ばれる松の木が立っていますが、この松は、黒松と赤松の2種類の松が根本で2本に合体しており、「相生(あいおい)の松」とも呼

ばれています。根本が1本になった松の姿を夫婦に見立て、一生添い遂げるようにとの願いが込められたのが、結婚披露宴の「高砂席」です。



マツ枝ぶり

マツのくねくねした枝ぶりは、3本の芽のうちどれが伸びるかわからないことと、マツの繊維が螺旋を描くことが原因です。盆栽はそれをうまく利用しています。



庭木、盆栽

マツは非常に丈夫な樹木で、土質を選びません。どんな場所でも栽培できます。風雨や霜雪に対しても強く、乾湿、寒暑、刈込にも耐えるので、誰にでも栽培できるという特長をもちます。寿命は長く、葉は常緑なので、いつも緑をたたえています。故に、松は庭木の中心的存在であり、小さくして鉢植えの盆栽としても愛(め)でられます。

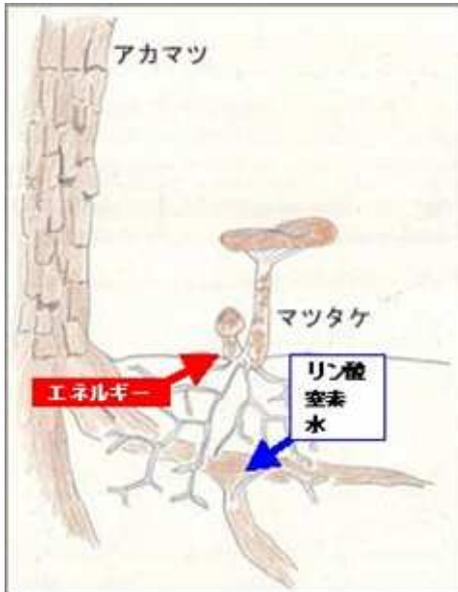


マツの花言葉

「不老長寿」、「永遠の若さ」、「勇敢」、「向上心」…真冬でも青々とした葉を茂らせ、寿命も長いことから、縁起物としての位置づけからイメージされたと考えられます。

マツといえばマツタケ

クロマツ林を探してもマツタケを発見できません。マツタケはアカマツ林にあります。



マツタケは、その名の通りマツの近くに生えるキノコですが、キノコの中でも「菌根菌」という種類で、木の根に付いて養分を与え合い、マツの木と共生しながら育つという特徴があります。マツタケは、アカマツの根っこがなければ育ちません。つまり、元気に育つアカマツ林があることがマツタケを味わうための必要条件なのです。ですからシイタケみたいに栽培が難しいということです。また、近年、アカマツ林に落ち葉掻きなど人の手が入らなくなり、マツが弱ったりすることで松茸の生える環境が失われてきており、昔なら里山で豊富に採れたマツタケが手に入りにくくなっています。



松露(ショウロ)

クロマツ林にはマツタケでなく、松露(ショウロ)というキノコがあります。小さなじゃがいものようなその姿は、およそキノコらしくないものですが、その豊かな香りが珍味とされ、高級料亭の季節料理として登場する代物です。ところで「トリュフ」の別名は「西洋松露」です。西洋の松露は有名です。

ショウロはマツタケと同じ「菌根菌」という菌です。これらの菌は、マツの根にリン酸、窒素、水などの必要な養分を与えるかわりに、マツが光合成で得たエネルギーの炭水化物をわけてもらうことで、マツと相利共生を営んでいると考えられています。

また、ショウロもマツタケもどのような松林にも生えるというわけではありません。どちらも柴刈りや落ち葉掻きが行われている林床や、10年以下の若いマツの下など、腐葉土ができていない場所によく見つかるそうです。しかし、よく似たニセショウロは毒なので専門家に見てもらってください。



夫婦愛

松は常緑樹で一年中緑を保ち丈夫なことから、不変の健康・隆昌・長寿を現し、葉は「**枯れても落ちて二人連れ**」言われ、と夫婦愛の象徴なのだそうです。たしかに、松の葉って、二本で一組ですね。パートナーに対し、いつも感謝の気持ちを忘れず、ず〜っと仲良くすることを意味します。

葉っぱ

アカマツ、クロマツの葉は、2本の針のようになっています。

そのうちの1本の葉の断面は、半円形です。根元は円柱状になっていて、そこから2本に分かれています。つまり、クロマツの葉は細長い円柱を縦に真っ二つに割った形になっています。これはクロマツが長い進化の過程で、円柱の葉からより光合成の機能の高い葉を作るために縦に2つに割ったと想像したくなります。



マツの仲間には5葉のものもあります。ゴヨウマツの5葉の葉を根元からちぎってみると、根元はコブのようになっていますが、周囲は丸くなっています。そして、5本のうちの1本の葉の中ほどをナイフで切断してみると、案の定、断面は三角形。円の中心から72度の角度で5つに切り分けた、大根のイチョウ切りとほぼ同じ形をしています。その5本の葉を束ねてみると、ちょっとねじれたり曲がったりしていますが、細長い円柱になっています。



3葉のマツ(北米大陸産のリキダマツ、テーダマツ)の葉も、細長い円柱を円の中心から360度の3分の1、120度で縦に3つに切り分けた形になっています。

松の葉

「松の葉」とは、松の葉に包むほどわずかであることから「ほんのささやかな」手土産を贈る際に、のし紙の表書きとして用いられます。意味合い的には「寸志」と同じ意味ですが、寸志が目上の方から目下の方へ送られる品に用いられるのに対して、「松の葉」はどちらの場合でも問題ありません。



マツボックリとパイナップル

英語の pine は「パイン」と発音されますが、パインは日本で「パイナップル」を指すことが多いです。実は、「松(pine)」と「パイナップル(pineapple)」には、その命名において意外な関係があるのです。パイナップルは英語で pineapple と書きます。これ、pine と apple に分けることもできますよね。pineapple は「マツボックリのようなリンゴ」という意味でつけられたという説があります。



ピンからキリまで



「花札」は1年、12月を身近な植物で代表させています。始まりの一月にマツを当てたのも当然だと思います。ちなみにマツはラテン語で pinus スペイン語で pino ポルトガル語で pinho 英語ではもちろん pine つまりピンの音である。一方、終わりの12月は桐。そのため、「初めから終わりまで」を「ピンからキリまで」というといいます。

マツの花とマツボックリ

スギやヒノキの花粉症は有名ですね。アカマツやクロマツは、花も春に咲いて雄花は花粉を風に飛ばします。そして枝先の雌花がマツボックリに育ちますが、成熟には時間を要し、2年目の秋によく熟します。種子は鱗片の上に2個ずつ並んでいて、薄い翼をつけています。

秋の晴れた日、マツボックリは熟すと乾いて鱗片を広げます。すると、くるるる……、小さく回りながら種子が鱗片を離れます。種子は風に乗って飛び、新天地で芽を出します。

種子を飛ばしたマツボックリはやがて地面に落下します。でも、中には次第に色あせながら2、3年も枝に残っているものもあります。



松のタネ

マツボックリのカサとカサの間に、薄皮みたいのが「タネ」です。タネに羽根がついています。(前回、私はタネがマツボックリの先端に胚芽が入っていると説明しましたが、まちがいでした。すみませんでした)。

市販の大きな「松の実」はチョウセンゴヨウのもので

す。



マツと日本人

日本人はマツが好きです。正月の門松から始めて、目出度いときにはいつもマツがあります。みなさんのなかで松のつく名前の方もおられると思います。松葉、松山、松並木、松飾り、松風、松葉杖、松竹梅、夫婦松、松明……とマツのついた言葉も数限りがありません。

私も樹木の世界に入った時、知っていた樹木はマツとサクラだけでした。



絵画の中のマツも数限りがありません。北斎や広重のほとんども、背景としてマツが登場します。古来、景勝の名も高い日本三景松島、安芸の宮島、天の橋立も、すべてマツが主役の景色です。

身近に在り、誰もが知り、親しみをもち、風最をなし、またその材をいろいろな用途に使ってきたことから、マツと日本人は切っても切れない絆で結ばれています。その固い絆は、**遠い昔からそうであった**ように思ってしまう。果たしてそうなのでしょうか。

弥生時代にはマツがない？

6500年前の福井県鳥浜遺跡。出土木材を調べると、斧の柄には硬くて弾力のあるユズリハ・ツバキ、弓には同じく弾力に富むカシ・ヤナギ・トネリコなど、盆や鉢にはトチノキ、土木建築材にはカシ・ヒノキ・クリ、板にスギ等々でした。これらの出土木材の中に、出てきてもよさそうなマツがありません。マツは使い手がなかったといえればそれまでですが、花粉分析の結果も、その当時マツはほとんど見当たりません。

2000年前の静岡市南部に登呂遺跡は弥生式文化の農村集落跡として有名です。とくに水田の遺構が注目されています。水田には畦(あぜ)があり、畦の崩れを防ぐためか矢板が立て並べられていました。ほかにもいろいろな木製品が出土した鉢、ひしゃく、機織具、すき、きね、丸木舟、弓、田圃へ履いて入る田下駄。住居や倉なども考えればかなり大量の木材ですが、それらの95%までスギ材でした。静岡市の南といえば、海に近く、明るい場所にマツが使われていないということは、**マツが近くになかったと解釈してもよい**でないでしょうか。

卑弥呼はマツを見たか

弥生時代後期の3世紀の「魏志倭人伝」は、卑弥呼と邪馬台国で有名です。この「魏志倭人伝」に、わずか30数文字ながら邪馬台国に生育する植物についての記載があります。

「これらの植物が構成する(邪馬台国の)森林植生を想像してみよう。これらの種はいずれも、わが国南部に発達する暖温照葉樹林植生に属するもので、上木はうつそうとしたタブ・クス・カシ類などの照葉樹に、部分的にはカヤなどの針葉樹におおわれ、疎開地にはコナラ、クヌギ、カエデ類があり、低木としてはカカツガユ、クサボケ、サンショウ、ササ類が繁茂し、草本にはショウガ科の植物が生育し、またタチバナ、シュロなどが点生するような森林植生の相観(植生の全体的外観)をしていたのではないかとと思われる。」(刈住昇博士)

邪馬台国が想定される九州、大和いずれも照葉樹林あります。この記事の解釈からは、九州説やや優勢の感あるものの、その所在を結論づけるまでには至らないようです。それはともかくとして、九州にも大和にも現在もっともありふれ、目立つ存在の、景観を特徴づけるマツの名が見当たらないのです。すなわち、**3世紀の邪馬台国には、マツはなかったらしい**。(只木良也先生)



図 1-3 魏志倭人伝抜粹 (ルビは刈住昇 1970 の解釈による) (只木 1988)

古代の陶器窯は語る

古代の陶器の窯跡の須恵器の破片から使用年代が推定できる木片が、窯に残っていました。分析された方によると、年代の古い窯の木炭、すなわちその当時使用した薪のほとんどはカシなどの広葉樹でしたのが、6世紀後半からアカマツが増え始め、7世紀後半以降になるとほとんど全部がアカマツに代わってしまったといわれています。

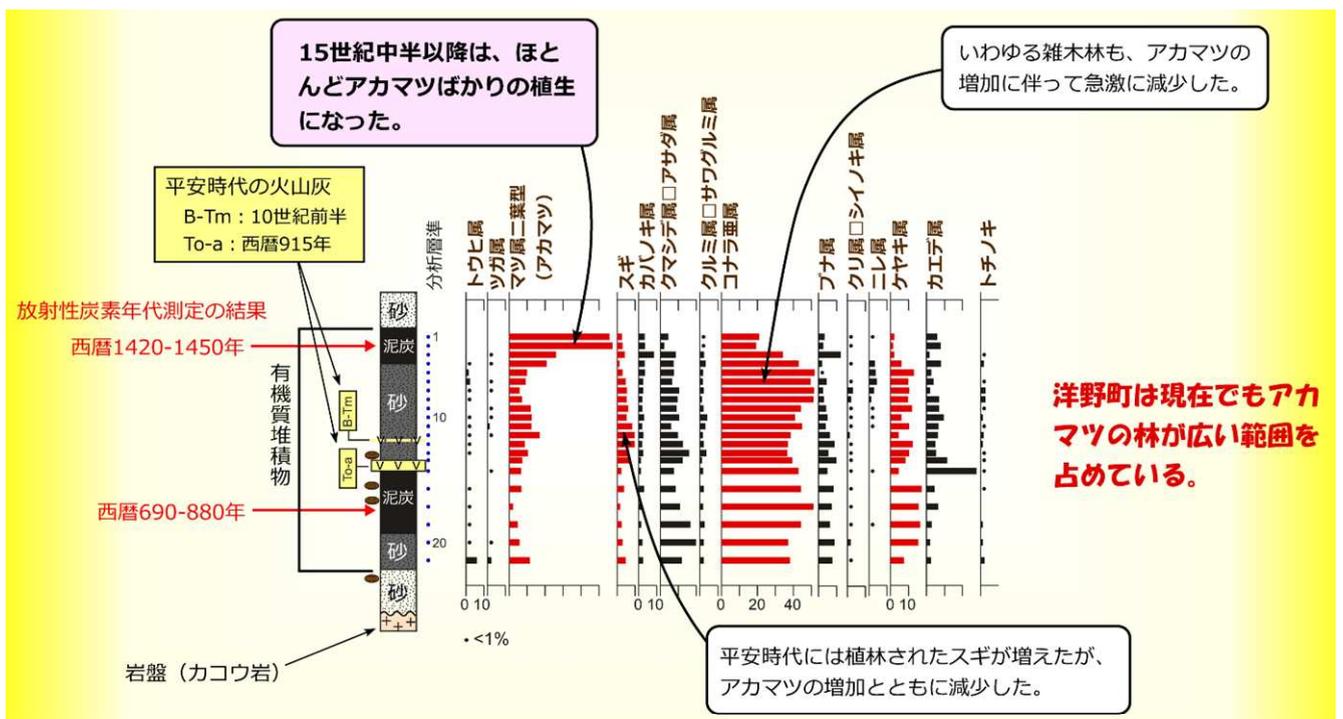
マツ材は火力の点などからいつて陶器を焼くのに適しており、いまでも薪を使う民芸窯などではマツに固執しているほどです。ですから、照葉樹林が伐り荒らされて、次第にマツ林に代わってきたと考えるべきでないでしょうか。

花粉が知る人の影響

「たたら製鉄」をご存知でしょうか。たたら製鉄とは、砂鉄を原料、木炭を燃料に精製する日本古来の製鉄法です。そこから生み出される玉鋼は現代の技術をもって再現不可能なほどの純度を誇り、現在も日本刀の原料として使われています。ちなみに、たたら製鉄は映画の「もののけ姫」にも登場します。女性たちが「たたら」と呼ばれる「ふいご」を踏むシーンが記憶にある方は多いのではないのでしょうか？

たたら製鉄は6世紀以降には全国的に行われていたようですが、技術的に完成したとされるのは江戸中期で、連続操業が可能となり、製鉄量が大きく増えました。木炭(たたら炭)の原木は、松、栗、槇が最も良いといわれ、ブナもよいが杉はいくらか落ち、シデ、こぶし、桜などは具合が悪いと言われています。

「人間活動」を、言葉を換えて表現すれば、「自然破壊」とも言えるでしょう。日本全国どこでも、時代が進むにつれて植生は変化しました。製鉄には大量の木炭が必要になるため、製鉄産業の隆盛は地域の植生を大きく変化させました。過去約1500年間の堆積物に含まれる花粉化石からみた植生変化が図からマツと人間活動の関係が読み取れます。



文化の進展とともに

8世紀も終わりに近い奈良時代末に編纂された万葉集には、マツは最もポピュラーな樹木として現れることになりました。

人々の活動が盛んになるほど、文化が進むほど、文化圏およびその周辺の森林が収奪を受けて地力が低下します。その土地本来の森林が維持できなくなると、やせ地にも耐える貧しい植生に代わります。その代表がマツでした。人間が森林の収奪を繰り返す、その土地がやせる、今までの樹木が衰える、その後を狙って、それまで尾根妨などのやせ地で耐えてきたマツが進出する。わが国各地の里山のマツ林は、多かれ少なかれこうした経過で生まれたものと考えられています。長い歴史の中で、繰り返されてきた収奪は土地が肥沃化するのを妨げ、マツ山の景観が維持されて、それは**日本の景色の代表**として、誰もが認めるものになったのです。

白砂青松(はくしゃせいしょう)は平安時代から

白砂青松という熟語は、日本で作られたものです。平安時代に書かれた造園の書「作庭記」に、「庭には池を海に見立てて、白い洲を作って松をあしらうべき」と記されています。海岸のマツと白砂が庭園の美を際立たせるものとして認識されていくのです。海岸のマツは主にクロマツです。クロマツのほうがアカマツより、潮風に強いのです。樹皮を比べれば、違いは一目瞭然で、クロマツの樹皮は厚く亀甲型に残ります。クロマツの松葉はアカマツより固く先端が尖るために、手でなでると痛く感じます。この固さが風で飛ぶ砂に対して抵抗性となるのです。強い風で移動する砂は、つぶてとなって葉に当たります。広葉樹の葉では傷ついてしまい、生育に影響しますので、浜辺で生き抜いている広葉樹の葉は厚くしっかりしています。砂も関西の土壌は花崗岩由来の真砂土が多く、海に流れ出る砂は白っぽくなります。このような条件が重なり、瀬戸内海で白砂青松の景観が美しい海岸として認識されていくのです。



マツが果たした減災の役目

江戸時代初期に、防砂林作りが始まります。徳川幕府が安定政権となり、戦乱が収まり平和な時代が来たので、新田開発が奨励されます。しかし、江戸初期には日本の海岸には砂が多く堆積していました。この砂は内陸の森林伐採各地でおこなわれた森林荒廃が原因です。山形県庄内砂丘は最上川から運ばれた砂が堆積しました。森林伐採の要因はたたら製鉄と製塩のための薪や炭作りなのです。また、城や寺院、都市の建設にも建築用材として大量の木材が切り出されました。内陸部の森林が荒れると表土がむき出しになります。雨が降ればそこから砂や土が流れ出すのです。広がった海岸の砂を止めるために試行錯誤をした結果、海岸線にマツ林が作られました。



この防砂林は三陸海岸では、津波の被害を食い止める役目も果たしました。2011(平成23)年3月11日、東日本大震災の津波で、7万本のマツ林はほぼすべて流されてしまいました。津波

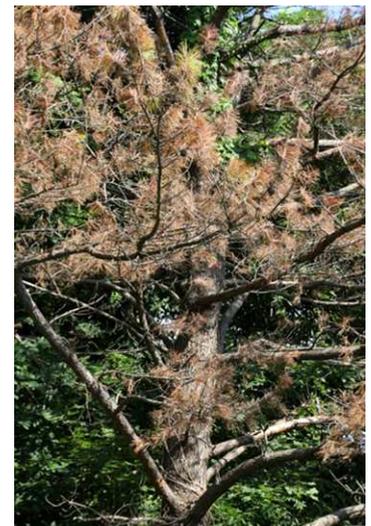
の勢いがあまりにも強かったために残らず流されましたが、マツ林がなかったらもっと内陸まで津波の被害があったはずで、マツ林が果たした減災効果はもっと評価されてもいいと思います。防災は被害を出さないことを目指す印象を与えるのに対して、減災とは被害を低「減」させることをいうものです。

苦しむ日本のマツ 長崎からの警鐘

1905(明治38)年、長崎市内でマツ林に集団枯損が発生したとの記録があります。その後、福岡県、鹿児島県、佐賀県など九州全域のマツ林で集団枯損が報告されます。1914(大正3)年、兵庫県の海岸林から瀬戸内海沿岸にまで被害が広まっていきました。松枯れの原因は特定できずに月日が過ぎていきます。枯れたマツの木からは大量の甲虫が発生するため、松くい虫防除が騒がれました。松くい虫のなかに犯人がいるのではないかと疑われ、被害地域では枯れたマツから発生する虫をしらみつぶしに調べました。これらの甲虫は健康なマツには産卵できず、弱って松ヤニが出なくなったマツに産卵して発生することが確認されたのです。マツは傷を受けると、樹脂道から松ヤニが滲み出てきます。健康なマツでは、葉や枝、幹に樹脂道があり、外側から形成層や師部を守っています。松ヤニは傷口をふさぐだけでなく、産卵された卵を包み、病害虫の侵入や水分の蒸散を防ぎます。

1mmに満たない材線虫が犯人

マツを最初に弱らせる犯人はなかなかわかりませんでした。そして戦後の1969(昭和44)年になって初めて、マツを弱らせた真犯人としてマツノザイセンチュウという1mm足らずの材線虫が発見されました。接種試験をして発病のメカニズムが判明し、昭和46年にはマツノマダラカミキリが材線虫を運び、伝染させていることが明らかになりました。この材線虫はアメリカのマツ材にいる材線虫でした。最初に発生した長崎と次に広がる神戸周辺には貿易港があります。アメリカから運ばれたマツ材にマツノマダラカミキリが産卵し、材にいた材線虫が港近くのマツ林に運ばれ、日本のマツに感染したのです。原因がわかったものの、松枯れの被害に対する有効な防除策は見つかりません。松枯れ被害は次々と広がり、昭和54年には岩手県、秋田県で被害が発生。松枯れ被害のピークを迎えてしまいます。この年に枯れたマツ林の面積は243万平方メートル、霞ヶ浦に匹敵する面積にもなりました。その後、枯れた木の伐倒駆除を進め、大切なマツには予防の薬を樹幹注入するなどの対策が講じられました。運び屋のマツノマダラカミキリが発生する5～6月には薬剤散布も実施しました。その結果、平成10年にはピーク時の4割ほどに被害は減ってきました。



日本三景の現状

天橋立、安芸の宮島、松島を合わせて日本三景といいます。自然景観に恵まれたこれらの土地の樹木に共通するのがマツの木です。天橋立のマツはひとまず安心ですが、松島の状況は深刻です。東日本大震災の津波で海岸のマツが被害にあいました。その後被害を免れたマツにはマツ材線虫病の被害が広がっています。なぎ倒されて枯れたマツ材は、マツノザイセンチュウの勢力拡大の温床になりますので、処理を急いでいますが、追いつかないのが現状です。その間に

も残されたマツに被害が広がる悪循環が続いています。松島からマツがなくなると名前を変えなくてはなりません。



マツノザイセンチュウの被害でマツがなくなってしまった名所が安芸の宮島です。宮島では弥山という山がご神体で、モミジの紅葉とシカが名物です。マツは名所のイメージは出ていませんが、過去に弥山にはマツがたくさん生えていました。マツ材線虫病の被害に何回も襲われ、今では弥山でマツの木を見つけるのがむずかしいほど個体が減ってしまいました。山の木々はシイやカシの常緑樹が復活しはじめています。有名なモミジは人が厳島神社の周囲に植えたものですから、現在も元気に生育しています。

マツ林を守る

先月、樹木医技術WEB研修会がありました。内容は松枯れ対策技術の話題でした。

全国の名園みたいに、どうしても守らねばならないマツ林があります。風景的に、また宗教や民俗と結びついたもの、貴重な品種として価値あるもの、そして、マツでなければ守れない悪い立地条件の林などです。これらの林はいたずらに拡散させず、対象とするマツ林を厳選して集中的に、例えば薬剤を用いるなどして、守らなければなりません。

薬剤使用については、いろいろと論議のあるところですが、しかしこれ以外に、確実な防除法がない現在、場所を限ってのある程度の使用はやむを得ないと思います。**隣家まで燃えてきた火災には、たとえ泥水であっても我が家にはかけざるをえないのです。**限られたところへの使用ならば、薬剤が周辺に及ぼす影響も少ないし、益虫や天敵まで殺してしまうとしても、その回復は可能です。そのためにマツ林厳選が必要なのです。**薬剤は非常手段です。**昭和57年改定された「松食い虫対策特別措置法」では、薬剤散布に加えて、被害木の伐倒破砕、焼却を徹底する趣旨がもられています。しかし、農山村が衰退するなかでは、その対策が徹底することもなく、被害は拡大したのです。(佐伯)

マツの終息？

燃料革命と化学肥料進出以来、マツ林は収奪されなくなりました。皮肉にもその土壌は徐々に肥沃となってより植生はかつてないほど豊かになりました。かつては燃料として先を争って採られていた枯木が放置され、マツノマダラカミキリに絶好の産卵場所を提供することになり、また肥沃なマツ林で生き生きとよく伸びた新梢は、カミキリの好餌になります。これらも、松枯れ拡大につながりました。松枯れが今日、社会的な問題としてこれだけ騒がれるのは、それが日本人にもっともなじみ深く日本の景色を代表するアカマツ、クロマツの問題だったからでしょう。

山が豊かになり環境保全に役立っていくなら、それは日本の山にとって好ましいことなので、その場合、必ずしもマツに執着することはないと私は考えます。

かつてその激害に騒がれた九州では、いま松枯れ騒ぎは下火となっています。枯れるべきは枯れ、もう枯れるほどのマツがなくなったのです。マツが優勢であったかつての風景は影をひそめ、その跡は土地条件さえ許せばシイ・カシなどの照葉樹林へと推移を見せています。いま全国

で行われているマツ林を守るための努力を否定はしません。しかし、広い日本の全部で画一的にマツ林を守ることはできない相談です。もはやマツに固執することなく可能なところはマツ以外の林に転換していくべきでしょう。針葉樹であっても広葉樹であってもよいのです。健全な森林の存続を図らねばなりません。これはすでに被害を受けた跡地修復の問題でもあります。

1000年あまりにわたった日本のマツ林の全盛時代は、いま終わりに近づいているように見えます。人間の森林酷使の歴史の中で、その土地本来の樹木が生育不能なやせ地をおおい、貧しい土地や岩石の上にすら根を張って、日本の山の緑を守ってきたマツの功績は大きいはずですが。もしわが国にアカマツ、クロマツがなかったとしたら、わが国土はどんなに荒れ放題になっていたことでしょうか。

マツ林は今後さらに姿を消していくでしょう。それは当然、松枯れの終息を意味します。「**人の手によって増やされてきたマツは人の手によって滅ぶ**」のでしょうか？しかし、マツは絶滅するわけではありません。ずっと昔にそうであったように、山の尾根筋や岩場などに生き続けているでしょう。残ったマツは抵抗性を持ちます。条件が整えば、また我々がその気になって呼び戻すマツ林になるとよいですね。

松竹梅

松竹梅の順番は、日本で「めでたいこと」の象徴となった年代の順番を表しています。



マツ

平安時代に吉祥の象徴となった松。松は1000年もの寿命があり、1年じゅう葉の色が変わらないことから「常盤木(ときわぎ)」と呼ばれ、縁起のよいものとされてきました。また、中国では長寿延命の木とされています。



竹

竹は、約3か月で親と同じ高さまで大きくなるほど、生命力を持った植物です。また、1年じゅう枯れることがなく、つぎつぎと新芽を出していきます。そのことから、**室町時代**より子孫繁栄の象徴とされています。



ウメ

菅原道真が愛したという梅の花は、厳しい寒さのなかでも1番に春の知らせを伝えてくれる植物であることから、**江戸時代**より繁栄・気高さ・長寿の象徴とされています。

松野 十四松(まつの じゅうしまつ)

気が優しいが、その分気が弱い六つ子の中で一番口うるさくおしゃべりで、歌もうまい。「自分が一番影が薄い」と悩むエピソードもある。名前は鳥の「十姉妹」から。



松野 トド松(まつの トドまつ)

末弟。のんびり屋で、風呂が大嫌い。末っ子ながらとどのつまりの甘えん坊。名前の由来はトドマツから。



みなさんはどんな〇〇松に似ていますか？

ついでになつかしい仲間。

イヤミ

チビ太

松野 松造(まつの まつぞう)

松野 松代(まつの まつよ)

ハタ坊

デカパン

ダヨーン(駄四)

トト子(ととこ)

本官さん

レレレのおじさん

ニャロメ

ケムンパス



おばあちゃんに習ったしめ縄

小さいころ、私は小杉のおばあちゃんに「ぼうや、ぼうや」とかわいがられていたそうです。おばあちゃんは、男の私に折り紙や人形の作り方を教えてくれました。その中で習ったしめ縄を皆さんに公開します。



しめ縄は年の瀬、スーパーやホームセンターにたくさん並びます。あれはわらでできています。わらは米を収穫した後のわらではなく、青々とした稲を乾燥させたものが良いものとされています。いまは機械で刈り取っているのでなかなか入手できません。新港の森ファンクラブの方で親戚が農家だという方に譲ってもらいました。わらをすぐり、木槌でたたき、よく揉みまます。そして左揃いで縄を揃えます。

わらをより合わせて揃(な)う方法に「右巻き」と「左巻き」が存在します。昔から、日用品で

使う縄は右巻きに、「神事で使うしめ縄は左巻き」とされてきました。しめ縄は神聖なもので、日常に使う縄とは区別する必要があったからそうです。もともと日本には「左は神聖、右は俗世」とする考え方がありました。例えば、神社に参る際に拍手をしますが、両手を合わせた後、右手はやや左手より引いて手を打ちます。他にも盆踊りが左回りであるのは精霊を迎えるためです。死者の着物は左前にしますよね。また「左右」という言葉がありますが、「左上右下」の考え方は飛鳥時代、遣唐使を通じて中国から伝えられたものです。

アカマツの経木

経木は、仏教と共に日本へ伝来したものであり、当初は経典を写す目的で用いられていました。紙が高価な時代には記録するものとして用いられていました。

昭和30年代までは包装材料として一般的に使用され、マッチ箱の材料としても利用されてきました。ポリエチレンやスチロールが広まったために衰退しましたが、現代でも駄弁の折箱として、使用されています。近年、殺菌・抗菌効果や使用後の堆肥化、バイオマス利用など、環境に優しい製品として再評価の動きがあります。

経木はアカマツ、スギ、マツなどを乾燥。0.1mmくらいにスライスしてできたもの。先が透けて見えそうなほどの薄さ。実は、経木というものは昔から肉やおにぎりを包むのに使われていました。商店街のお肉屋さんが包んでくれていたあれです。今では発泡スチロールの容器に変わってすっかり見かけなくなりましたが、そんな経木にも、私たちが知らないだけで使い方がたくさんあります。

普通、経木はアカマツを使用します。アカマツを使用する理由は、次の特徴があるからです。

- <抗菌作用>アカマツのヤニには、抗菌作用があると言われています。食材とともに使う場面も多いため、安心して使用することができます。
- <調湿作用>湿度を適切に保つ、優れた調湿作用があります。経木に包むと、乾燥しないとともに、結露を防ぎ、食材の鮮度を保つことができます。食材を包んで冷凍することも可能です。
- <香り>アカマツの香りは強すぎないため、食材を包んだときに味の邪魔をせず、素材の味を引き立ててくれます。
- <材質と油分>木の中でも、堅すぎず、柔らかすぎない材質と、適度に含まれる油分。この特徴によって、耐久性のある経木を作りやすい。
- <節の間隔>節の部分は経木として使用できません。アカマツの節は、経木の材料を取りやすい間隔にあるため、経木の生産に適しています。
- <木目とつや>アカマツは木目が美しく、見た目の美しい経木を作ることができます。

